
Dear/She's

才切

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear / She's

【コード】

N2808W

【作者名】

才切

【あらすじ】

クラランチ文体の習作。

No. 1 (前書き)

文章の習作を兼ねていますので、完成度は底辺です。

正確な拍子が、床を叩く。

ブーツの靴底は、石造りの床を弾いてリズムカルに打ち鳴らした。響く音の主は、ドラム缶に腰掛けた少年。

染めたような茶色い髪色・やや吊り上った目つき・腰元に吊られた禍々しい『何か』を除けば、世間一般で言うところの今時の少年。少年はコードレスのヘッドホンを掛け、瞳を閉じながら延々と足を揺すった。

彼が今居る場所は、場末の廃屋だ。

市街地からは外れた、人気のない場所。本来は何かの工場として機能していたらしい。しかし機材の類たぐいが運び出された今となっては、ただ広い無意味な空間に他ならない。

転がる空き缶、金属片、割れた窓ガラス 退廃の証。
辺りには宵闇が立ち込めて、広大な廃屋さえ包み込む。

そこには少年の他にも数名の人間。見るからに堅気でなさそうな男たちがたむろしていた。けれど、少年はその数名の輪から弾き出されている。

おそらく、故意に。

相変わらず瞳を閉じて瞑想している少年を他所に、他の者達は話し出す。

一人、訝しげに

「…あれが、新しく雇った『違法術者』ですか？ まだガキじゃないですか」

一人、同調して疑問点を打つ

「ああ。正直こつちも驚いてる。フリーランスの腕利きと聞いていたんだがな」

一人、一笑するように

「どこの出任せだ。そりゃ」

彼等が少年の存在を良く思っていないことは明白だった。

「なあに。高い金積んで頼んでんだ。分相応じゃないときは……」

「お置きしなきゃあな。……教育的な」

男たちは不穏な笑みを浮かべて、少年を尻目に見やる。

すると、澱んだ雰囲気は勸付いたかのように、少年は一息でドラム缶から腰を浮かす。

軽やかなジャンプ＝羽根の落ちたように無音。

彼はヘッドホンを首にずり下ろして、男たちを一巡に見渡した。

真つ直ぐな視線に、僅かに男たちは怯む。

少年 悪気など微塵もなしに無遠慮な視線で睥睨。

形の良い唇を吊り上げた。

「……お客さんだ」

「……あ？」

男たち 『お客さん』の単語に場違いさを感じ、少年の台詞に間の抜けた反応を返す。

少年 やはり無邪気な笑顔・子供っぽい上目使い・拗ねたような口ぶりで

「オジサンたちは下がってなよ。こつからはオレの仕事だ」

踵を返し、ヘッドホンを首元にずり降ろす。

さして年を取っているわけでもないのに、生意気な子供にオジサン呼ばわりされ、男たちは彼に喰って掛かろうとした。その時。

工場全体に、光が差し込んだ。

閃光／目眩まし＝揺動の誘発。

人工的で強烈な光源は、工場の外から内を曝け出す。

少年は口を窄めて、口笛を吹く。

表すのは感嘆／賞賛…嘲り。

彼は優しく囁いた。

「征いくよ。『バイヨネッタ』」

言葉と同時に、少年は自らの後ろ腰に掛け下げられた『それ』へと手を伸ばす。

グリップを力強く握り、前へと引き出す。

瞬時 霞む黒体／鋭い突起／筒に似た銃身。

二段式収納になっていた得物は、一振りで展開され禍々しい容姿を開く。

輪郭は鋭匙で無機的な物質そのもの。無駄なものは一切ないと語る。

差し込む斜光が、正体を露あらわにした。

刃／銃筒／回転倉

『それ』は小機短銃のしんに鋸のような刃物を取り付けられた、マスクツト銃だった。

少年は重質な武装を軽々と片手で携え、前を見据え言う。

宣戦布告／誘出／勧告の意味を持つ一言。

「さあ、狩りを始めようじゃないか」

要約〓これ以上に楽しいことはない、ゲームに夢中になる子供と同じ笑みで告げた。

街灯が胡乱に、周囲の空間を浮かび上がらせる。

ぼんやりと／放蕩と／虚ろに 景色は霞み陰りゆく中で揺れる。

そこは波止場はとほ。

船の行き着く場所。船の出いでる場所。

人の流れや物資の流通と同様に、波の音も寄せては返し、遠ざかつてはまた近付いてくる。

灯りが眼下の波間を照らし出した。

表面上では反射。屈折した光は暗黒の波奥へ。

黒々としていて、底など見えはしない。

重い水〓混沌の具現

落ちたらきつと地獄の底にも辿り着けない。

青年は一人、波間を見下ろした。

長身な体躯・腰に挿された長柄の刀身・冴えた顔つき

形質は影にも見て取れる。

彼のコートが、風にはためいた。

時刻はもうすぐ深夜。

彼はひたすら待っていた。

自らの存在意義をノ戦闘の合図をノまだ見ぬ『誰か』を。

『もしもし？ もしもーし！ きこえてますかー？』

唐突 青年のイヤホンから、高い声音が漏れる。

<幼児さながらの無邪気さ> + <純粹無垢さ> + <完全なる無防

備> - <大人への警戒心>。

〓『誘拐するには持ってこいの愛らしい少女』

ふと思いついた方程式を完全消去 無表情を完全保持。

甲高く幼い声音に、普段通り冷静に応じた。

「聞こえてますが、じゃない。聞こえてますか、だ」〓少し太い

ハスキーな声。

『んん？ ゆりあ、よくわかんない』〓返答。本気で不思議そ

う。

諦念を内心で滲ませ「なら、そのままでもいい」

青年は不毛な遣り取りにも顔色一つ変えないで質疑する。

もう、慣れてしまった所為かもしれない。

彼は本題を提示。

「…ところで、何の用だ？」

『あ、そうなのお！ あのね。こっちはおーけーだよ。ママがね、言っておけて。えらいでしょー』〓えっへん、とでも言いたそう。

舌足らずで、幼稚な文作り。

相手の少女〓14歳。本来ならば思春期真っ盛りの中学校二年生。

……特に何も感じない。

「ああ。…無事に帰れたら、褒めてやる」

『やつふー！』

「……また後で」

一息〓溜め息 闇夜に霧散。証拠隠滅。

青年は無線を切ると、目の前の建物を見上げた。

やけに虚無的な心境〓結論〓どうでもいいから。

長丁場になりそうか。

他人事のように、彼はぼつりと思った。

いつもの仕事・作業・後片付け

「…逃げられると思うなよ」

意志の熱を持つ言の葉。

彼のその眩きも誰の耳にも留められることはなく、夜に消失した。

けたたましい音が連続的に聞こえる。

工場の鉄鎖の扉が開かれ、幾つもの足並みが硬質の地面を駆ける音 進入してきた警官服の者達の音。

彼らは形状こそ異なるものの、一様に武器をこちらへと向け威嚇している。

すなわち 投降しろ／手を上げる／お前を完全に包囲している／こっちはいつでも撃てるんだぞ。

伝わってくる意味合い〓無意味と判断。

渦中にある少年は、ゆつくりと銃剣を構えた。

顔に浮かぶ笑み〓年長者にするとは思えない嘲笑。

口唇の軋を外し、一言。

「 掛かって来いよ。いっぺんに済ませた方がラクでいい」

侵入者を撃退することを前提とした「煽り」

警官服の男たちは武器を構え、少年へと駆つた。

… 10人、いるか、いないかだ。

そもそも、彼にとつては「凡人」の集まりなど10人もが倍の20人に増えても五十歩百歩。全くの無問題。

「凡人」の統率のとれていない群れを一瞥 歯噛み。

舐められたものだな、と少年は溜息を洩らす。

逸早く少年を有効射程に捉えた警官は中距離で発砲。

手中の銃器は汎用警備長銃／繰り出される銃弾／描く軌道

「歪んで」やがる。

少年は飛んできた弾丸を見切り、銃剣で弾き落とした。

「汎用武装お？ オッサン、侮り過ぎだろ」

片目だけで顔を顰める。

半眼で呆れたように言って、少年はステップを踏み跳躍〓まるで兎か鹿。

高低2mを越す跳躍に、困んだ警官たちは啞然とした。

「貴様！ 身体術者か!?」〓「凡人」一名の驚愕の叫び。対する少年の所感〓「ばっかじゃねえの?」

彼を見上げる男のうちの一人が声を荒げる。

「さて、あれは……」

『誰かさん』の気付きに対し、彼は口端を吊り上げて笑うことに応えた。

一気に壁際まで跳んだ彼は壁に足を溜め、バネの様にまた跳躍。俊敏に/迅速に/一片の慈悲もなく

銃剣を大きく振り上げ、真下にいる男の一人に振り下ろす。

「りゃああ!」〓裂帛の怒号。

共に銃剣から斬激が生み出される。

それは、小柄な少年が発するにはあまりにも強烈な衝撃/打撃/波動

同時に、男たちの数人がぱたりぱたりと倒れる。

彼らに出血はなく、代わりに泡を吹いて意識を失っている様〓気絶しただけ。

たん、という小気味の良い音がして、また一陣の風が奔る。

警官服の男は、糸も簡単にばたばたと倒れていく部下を見、驚愕した。

…どうなっているんだ!?

少年の行動の軌道が、全く持って読めない。連続に術式を発動している 何故?

どれだけ加速する…?

治安維持組織の常識。施術式の第一項目。…身体施術式には多大なる体力と技量が必要だ。

合間なく発動する少年にどれだけの負荷が掛かっているのか、男の想像の範疇に無い。

布陣を誤ったか…！

滲む後悔。

今回の任務・計画　麻薬取引団体が交渉の場に出た時を、一斉に袋叩きにするという作戦。

相手の戦力はこちらよりも圧倒的に少なく、力量も及ばないと算段していたというのに。

しかし相手側も、こんな切り札を用意していたとは

くそっ、台無しだ……

生まれた後悔は実害に、実害は新たな公開を生む。

痛手があまりにも大きい。

少数人での戦闘経験のない者でも、撤退するという判断が優良だと分かる。

現に、彼の仲間は何人も倒れ伏している。これ以上の戦闘は無意味だ。

「…命令だつ！　撤退しろ！」　八つ当たり気味の怒声。

少年の雑感「大人げねえ！」。

『凡人男』の声は威厳を持って廃した建物内に響き渡り、残った警官服の男たちは逡巡を見せる……が、すぐに従い少年から距離を離していく。

少年の嘲り「流石腐っても公僕。縦割りには逆らえないよね。」

異変　唐突に。

加速が途切れ空中に姿を現す少年「床に真つ直ぐに降りると、牽制するように警官たちを一睨みする。」

いいからさっさと帰れ。

男たちは気丈な顔つきを崩さないまま静かに後ずさりをし、場を後にしようとした。

…その声が掛けられるまでは。

「　待て」

よく響く声は、まだ年若い青年のもの。

しかし絶対服従の命令のように、男たちはその場に足を縫い付けられた。

抗えないもの「権威／利害／自分に危害を加える『何か』」。

建物の入り口には、一つの長身な影がある。

仁王立ちしているのに威張っている気はしない。むしろそうするのが自然といった風貌。

少年の直感「こいつと関わるな。」

不可視の予感「『あれ』は『あいつ』は『あの存在』は 駄目だと。」

続けて、影の人物は言葉を発する。

「誰が撤退命令を出した？」「威厳を孕む王者の風情。」

「お…お前…」「滲み出る戸惑い／驚愕／ある種の恐れ。」

警官服集団の代表格らしき人物が、うろたえながら入り口の人物を見る。

周囲の人間の戸惑いの視線を受けながら、彼は集団へと歩み寄って来る。

低い声・相手を威圧する目つき・冴えた顔つきが露わになる。

ああ、やっぱり。

嫌な予感、自分の苦手な人種 勘弁してくれ。

少年の内心など男は知る由もなく

「連絡は行っていなかったか？ 局員が来るまで待機と伝えたはずだが」

突然の乱入者は、凜と響く声で問いかける。語る声はまるで絶対服従命令。独裁者の如く。

声音はむしろ穏やかだというのに、対する男は更にうろたえ

「…そ、それは」

「局の命令に背くのがどういうことか、分からないわけではないだろう。…慎め」

「しかし……！」

言い抗う『凡人男』　あくまで殊勝な『危険人物』

「弁解は聞かない」

『危険人物』　「青年はぴしゃりと告げ、自らよりも年上の中年警部を黙らせた。」

傍から見ていた少年は、ふと疑問を抱く。

「なんだ？　仲間割れか？」

銃剣を下ろし、いぶかしむように二方の関係を窺った。

青年は、警察服の彼らの同胞なのだろうか。

否。態度が威圧的に感じる。横柄だ。

上司も少し違うよう気がする　何となく。

「今回は報告はしない。だが、次はない。覚えておけ」

青年は静かに警官服の男たちを見渡し、次に少年へと向き直る。

交錯する視線／意図／自らの『敵』としての裁量判定　まるで値踏み。

少年は物怖じせずに詰問。

「あんた、何者だよ？」

答え、即座に。

「違法術者に名乗る名前はない。とつとと失せる」

次の瞬間、衝撃が脈打つ。

鼓動のような／打楽器のような／岩を砕く荒波のような／地を裂く雷のような　青年が生み出した現象。

少年は咄嗟に回避を行い、壁際に身を寄せた。

見ると、つい先程まで少年が立っていた場所には引っかけ傷にも見える亀裂が入っている。

さながら、巨大な獣が腕を振り上げた後の様。

直撃を免れた少年は、背に冷や汗を感じ

今のが施術式か？　いつ予備動作をしたんだ…？
率直な動揺もしくは慄き。

ただ一つ分かるのは、この目の前の敵がかなりの手練だということ。

少年の回避にも、青年は炯眼を崩さない。

「次は　外さない」　青年。未来予知にほど近い宣告。

「……！」　少年。おいおい、マジかよ。

またもや、突然に斬激が奔る。

少年は小柄な身体を浮かせ、加速。

ステップを踏み天井を蹴った。

蹴る／跳ぶ／避ける／弾く／傾ける

しかし、回避はただの時間稼ぎに他ならない。

死神は青年の形をしている。

どうにかしねえと……！

加速は肉体に大きな負荷を掛ける施術だ。

幾ら適性のある少年でも、何重と重ねていけば必ずガタがくる。

この瞬間が／弾指が／刹那が　時間が惜しい。

迷ってる場合じゃないっ

少年は決断し、壁を蹴って中央に立ち塞がる青年へと突進した。

銃剣の刃先は青年の顔横を掠め、彼の艶やかな黒髪が数本切り落とされ、舞い落ちる。

対象の後方へと回避した少年　再び加速をしようとステップを踏

む　しかし、身を騁る衝撃が背を襲撃。

脊髄に直接響く痛覚／衝撃

「かつ…は…！」

後ろからの衝撃波に肺の中の空気が一気に吐き出され、身体が投げ飛ばされる。

少年は驚愕に目を剥いた。

後方への攻撃…？

少年は見る　攻撃を放った青年の足元から、六方に抉る爪痕

が伸びている。

謎は一瞬にして氷解。

「はっ、あ…、多方位施術式師か…!？」

隅へと追いやられた少年は、床に手を着きながら問う。

青年は、当初と寸分も変えない面を少年に向けた。

「直前の回避で急所を外したか。『クセ』は分かった。お前は夕イミングを取らないと術式が発動できない。…致命的だ」

少年は僅かに沈黙　しかしすぐに歯を見せて笑う。

歡喜を孕み・至福を感じ・予期に胸躍らせる……獰猛な笑み。

「ははっ……すげえや、お兄サン。この短い間でそれを見抜くなんてね」

少年は傾いだ背を起こす／立ち上がる。

口元が、不適に歪んだ。

「…そう。発動のタイムロスは俺の欠点だよ。でもさア。それを補う方法だって、あるんだぜ？」

瞬間、変化は起こった。

今まで一步もその場を動かなかった青年が、上体を崩す。

あたかも、地から何かに引っ張られているように。

「…重力術式？」「怪訝そうな声。

応じる首肯」「そう。さっきの奴等も、俺の銃剣にやられたんじゃない。俺の重力施術式でくたばったんだ。お兄サン、あんたはもう俺の攻撃を受けた。なら、施術式の有効範囲内だ」

青年は先程の、髪を数本切り落とすだけの刺突を回想。

接触は僅か数ミリ。一寸だ。

「…あれだけの攻撃でこれ程の効果、お前の武器は業物だな」

青年「危惧を確信として消化。

少年「嬉しげに肯定。まるで新しい玩具を見つけた子供。

「そ。大戦時の『殺戮の銃剣』^{ヘコネット}。さア、続きをやるよ。お兄サンも腰のそれはお飾りじゃないだろ？」

少年、満足そうに青年のベルトに吊り下げられた刀を見やる。

青年は口をつむぐ。

沈黙／逡巡／僅かな躊躇い。

らしくないと自覚。

「……………」

「ナニ？ 腰が引けちゃった？」

「いや。いいだろう」

青年は背筋を伸ばし、腰の鉛に手を掛ける。臨戦体勢／少年の問い掛けの答え。

重力術式による荷重など、全く問題外だというような自然な構え。少年は感嘆。初めて相対する敵に敬意を示す。

やや前屈みの体勢のまま、青年は敵対する人物を見据え、宣誓。「これからお前に引導を渡す。俺は術式管理局局員 区法寺……」

掛かって来い」 〓あくまで、鋼の真剣さを持ち

「そうこなくっちゃあね。じゃあ、こつちも冥土の土産に教えてあげるよ。オレの名前は風間。あんたの最後の敵だ」 〓一方、悪ふざけの延長線に存在。

「ぬかせ」

そうして、波動が場を包み込んだ。

二つの相反する力が敵対していた、正にその時。

青年・少年　二人が居る建物から出てきた、幾つかの人影「銃剣を操る風間と名乗った少年が、警官たちが来るまで話していた連中。

ドラッグ密売の犯罪者／密入国者／裏の世界で生きる者たち

「まさか術式管理局員が来るなんて……！」　　ふざけるな……
といった所感。

「馬鹿ヤロウ！　喋るなっ！」　　八つ当たりじみた叱咤。

十人にも満たない男たちは、一様にアタツシユケースや麻袋を抱え込んでいる。

中に納まっているのは、法外の薬品　違法ドラッグの数々「麻薬・覚醒剤・LSD……その他諸々。

国内の医療機関から法外の金で買い取ったそれらは、見つければ所持していたもの全てに終身刑以下の重大な罰則が義務付けられるいわば無期限爆弾だ。

彼らはその爆弾を管理していた場所を、つい先日警察に知られてしまった。

身内に内通者がいたのだ。

「畜生！　何たつてまた警察にバレてんだよ！」

「違法術者を護衛に雇つといて正解だったな……」

口々に急かせ合いながら、彼らは狭く暗い路地裏を走る。

ともあれ、あの廃工場にあった違法ドラッグは回収できた。

今、あの廃墟では雇った違法術者が警察の相手をしている。十分な時間稼ぎ。

後は、近場で待っている仲間の車で逃げれば、そうそう後は追えまい。＝彼らの所見。

彼らの中には、すでにドラッグを売った金で何をするかを想像し、ほくそ笑んでいる者さえいた。

「おいっ！ 曲がるぞ！」

先頭を走る男が叫ぶ／急かされ足早になる面々。

集団の誰もが知ってた。路地を曲がった先には仲間の車が用意されていて、後は逃げ去るだけだと。

意気揚々として、その場に滑り込んだ彼ら 瞬間、表情を凍りつかせる。

「な…なん…あ……」

舌滑が滞ったのか、歪な発音を一人の男が発する。

開けた深夜の道路 歩道際には大きなワゴン車が止まっている。

白かった筈の車輻 明るい橙 車は炎で轟々と燃えている。

彼ら 文字通り足をへし折られた者のように心許なくなる。

同時に意味を図りかね。

一つ、一体、何故自分たちの車が燃えているのか？

一つ、待機していた他の仲間はどうしたのか？

一つ、自分たちは、これからどうすればいいのか？

呆然としていた男たちの前に現れるもの 炎の光を背に受けた、細身なシルエット。

「この場にはあまりにも不釣り合いなもの。

白いワンピースを着た少女。

純粹さ／無邪気さ／明るさ／無垢さ／可愛らしさを凝縮した…いかにも大切に大切に育てられた幸福な子供。

彼女の桜の花卉の様な唇が言葉を紡ぐ。

「ねえ」 屈強で柄の悪そうな男たちに引けず。

彼らは呆気に取られ

「ねえ。ね、おじちゃんたち…：…：しーちゃん知らない？」 単

純にその事実が知りたいと言いたげに。

「は、あ？」 男たち、意味を理解できず。

少女は男たちの反応さえ気にせず話す。

「しーちゃん、怪我とかしてないかな…な…?」

少女は見た目の割にやけに子供っぽい口調。何度も問いかける。

何だ、このガキ。

迷子にしては、年齢が明らかに大きい。中学生か?

「しーちゃんね。ゆりあのこと、ほめてくれ…るって…って…
…う」

嫌な予感ノ 何だ?

少女のただならぬ雰囲気、男たちは身構える。

彼女のそれは、喻えるならば泣き出す前の幼児に近く といふよりも、そのままだった。

「うわええあああああああああああああああああああああ
あっ!!」

「……!!!??」「…」

少女は思いつきり天を仰いで泣いたノ叫んだノ泣き叫んだ。

男たちノ益々混乱。

なんだって自分たちは、車が燃やされて、子供に泣かれて。

混乱の渦に落ちかけた思考を引き戻したのは、何とか客観的に状況を見ていた集団の一人。

「お、おいつ! このガキを黙らせる! 警察が気づくぞ!」

焦燥の言葉に誰もがはっとし、少女の口を男たちの一人が押さえ込む。

少女ノ諸手で抵抗ノ塞がれた口で腹話。

「む…ふ、むううむむ…:…んーんー!」

「黙ってる嬢ちゃん。傷物にされてえのか?」

少女を拘束する男ノドスの効いた声で脅し、涙目になる少女を更にきつく押さえ込む。

じたばたと少女は暴れ けれど、彼女の細い身体では何の抵抗にもならない。

男の一人ノ焦りと苦みを噛みしめ。

「…しょうがねえ、とりあえずここから離れるぞ」

「離れてどーすんだよ！」

「車でも拾うしかねーだろがっ！ …… ああ、クソツタレ」

苛ただしげに、男は壁を蹴り その粗雑さに、男の腕に捕らえられた少女がびくんと反応する。

「そのガキは…」 || じろり、と見る無遠慮な視線。

「ふん。知ったこつちやねえよ。 …… ただ上玉だ。勿体ねえから連れてけ」 || じとり、と見る意味ありげな視線。

「この変態が」 || 吐き捨てながらも口元に浮かぶ笑み。

少女は自らに向けられてくる卑しい目つきと下卑た笑いに、更に脅えた / 今更ながらに危険を感じ / 助けを内心で懇願する。

「つと…騒いじまったな。早く」

「早く、何だつて…？」

ぴん、と空気が張り詰める。

男の台詞を途中で遮ったのは、程よい芯の強さを備えた美声。しかし、声音には明らかに殺意が混ざり。

「逃げるのかい？」 || 甘美な響き。けれど男たちの背筋をぞつとさせる。

その瞬間、僅かに緩んだ男の腕から、細身の少女は身を擦って逃れる。

少女 || 美声の主の元に全力で疾駆。

「ちよ、このガキ…」

伸ばした手は少女の背を掠め / 男は体勢を崩す。

少女は美声の元へと駆け走る。

「ママ …… !!」

「…百合亜」

彼の人物は腕を広げて少女を迎え入れ

「ままあ、ママ、っあのね…」 || 少女、半泣き。

「大丈夫。もう怖くないよ。怪我はない？」 || 乱入者、幼子を宥

める母親そのもの。

「ん……」

泣きじゃくり、抱きついた胸に顔を埋めながら百合亜と呼ばれた少女に頷く。

彼、もしくは彼女に何度も彼女の頭を撫でて宥める。

母性に満ちた顔から発せられたのは、氷の声。

「私の娘を泣かせるなんて……命知らずにも程がある」

酷薄な笑いを浮かべ、その人物は顔を上げた。

中性的な顔をした、年齢の掴めない者。

均等の取れた長身／凹凸のない身体つき／やや低い声／……男性の様にも見える。

色素の薄い長髪／上品な物腰／小綺麗な顔つき／……女性の様にも見える。

ただ一つ確実なのは、その中性的な人物は絶世の美人だということだ。

男たち「彼」の美しさに思わず見惚れ だが次の瞬間、男

たちは地面を舐める。

押し付けられる重圧に圧倒的なプレッシャー

「……があ……!？」

「娘をまわそうとした罪は重いよ……?」

『彼』は口唇に三日月の笑みを浮かべる。

ぞつとするような美しく、禍々しい笑みを。

「はあっ！」

掠った斬撃は弧を描き、白刃の塵気楼を残す。

少年と相対する男は刀を抜き、新たな衝撃に耐える。

鈴の鳴る音 刀は鞘へと戻る。

居合い使いか？

少年は風間／内心で舌打ち。

青年は区方寺／炯眼に無言で風間を見据える。

二人の共通点 互いが互いを敵と認識。

またの名を抜刀術とも呼ばれる居合い 主に細刃の刀で行われる。しかし目の前の青年は涼しい顔で、太刀で居合いを扱ってみせる。

何かの強化術式をかけているのか、はたまた本来の彼の技量故か。

前者ならまだしも、後者ならば厄介。かなりの場数を踏んでいると見える。

風間はステップを踏み／一旦後退。

施術を使った後の、鳴り響く頭痛はどうやっても慣れない。

がながんがながん うるさい！ 少年の内心の所感。

青年が名乗った区法寺という姪は、特殊な施術式を習得した者にだけ与えられる名誉称号だ。

区法寺 確か、方位系術式を習得したもの。それも、多方位術式を修めたものにしか与えられない上級の称号は達人級レベルに相手にとって不足なし。

相乗して、区方寺は若くしてかなりの手練であると推測。

それならば先ほど、年上の警官に命令してのけたのにも説明が

付く。

風間は靴先が床を離れると共に、加速施術式をかけた。

カウントダウンだな。『バイヨネッタ』

あと、最大でも五回。それ以上は体が持たない。

節制のある戦いなんて、少年の性に合わない。

でも、まあ……

極上の『敵』が目の前にいることは最大の幸い／故に今は全力で闘劇を演じるのみ。

少年は消失する。

青年は片手で太刀を構えたままに応戦。

衝撃Ⅱ真正面から。

「っ！」

脳天をかち割らんばかりの渾身の一撃Ⅱ少年。

太刀を即座に横にして防御Ⅱ青年。

火花／閃光／金属音

一撃を見切り、少年は跳んで退避／身を立て直し／防御Ⅱ約一秒

コンマの間。

青年の追撃。

脇で構え、研ぎ澄ますⅡ臓腑を抉る『突き』の構え。

一瞬にして空いた距離を無効化／再び交わる闘牙。

一方は業物の太刀 一方はあくまで銃剣。

近接では太刀に敵わない。

遠距離では銃に敵わない。

しかし今は近接戦Ⅱ現状維持が青年の勝利に結びつく。

よって射程距離を取らせまいとする計算ゆえの接近／強迫／追撃。

対する少年Ⅱ風間。銃剣の『最も効果的な空間』を取れず、歯噛み。

カウントダウン あと三回。

それからは常人以下の機動力しなくなるⅡ負けを意味。

焦るな。

焦ったら負けだ。

風間の変幻自在さ／区方寺の問答無用さ〓接戦。

「ふふ」〓少年、唐突の音／笑声。

「…何だ」〓青年、訝しみの意味を込め

「いや、こんなに切羽詰まって戦ったのは久しぶりだろうと思っ
てね」

愉しげ 辛辣な口調

「…お前の腕前が腐っていないことを祈るな」

「そうだね。折角、上等な奴に出会えたんだからね。お兄サン」

「俺の名前は区方寺だ。『違法術者』」

「オレの名前は風間だよ？ 『お兄サン』」

瞬時。

少年は初めて銃剣を展開〓銃筒の大半が露わに／鋸の刃が銃筒の
反対へ／全体的に二倍の大きさに

その状態で、初めてトリガに指を掛ける。

青年、太刀を正眼に構え 両者の相対。

悪ふざけと戯れと飽くことない欲求を以てして。 闘争への回

帰を望む

真剣みと引導と断罪を以てして。 鋼の意志を持つ

相反する存在。

両者は瞬く間に攻防の演武を再開。

風間が引き金を引く 銃室に着火／爆発／促進／鉛弾を弾き出
す。

ダンダンダンダン
連打連打連打。

避け／弾き落とし／掠め／叩き落とす〓区方寺。

切迫〓弾幕をかい潜り進む。

身体施術の発動〓加速。

接触 離脱

「くっ……！」

一息で奥歯を噛みしめ、押し留まる少年。

罅迫から、鋼のぶつかり合いがぎちぎちと音を鳴らす。得物と両者の力量が削られる音。

押し負けが負けに直結する。

銃筒を縦にした発砲は自爆を招く。少年は動けない。

罅迫からの攻防は不可能、一度間合いを開かなくては。青年の判断。

区方寺は風間の足に払いを掛ける。

「……！！」

一瞬にして形成が逆転。

視界が反転／背中に衝撃／頭を打ち付けかけて受け身を取る

立ち上がるうと半身を起こしたところで 少年。風間の首元に

切っ先が向けられた。

太刀を構え見下ろす青年。

負け惜しみじみて、銃剣を青年に向ける。しかし旧式のマスクレットが銃筒を縦にして発砲できるはずもない。

結果は明白。

区方寺は冷たい色を孕む瞳で

「……投降してもらおうか。違法術者」

「……っ」

風間は熱を溜める瞳で

「もう一度言う。大人しく投降しろ」

「……嫌、だね」

トリガーに指を掛ける。

青年は目付きに険を宿らせ

「……自爆するぞ」

「……さあて、それはどうかな……」

少年は歯を見せて笑った。

引き金を挟み

次の瞬間、空間が無音に包まれた。

「うわあ…いたそーなの……」

目の前の少女　跳ねたツインテール／白いワンピース〓砂糖菓子みたいな、薄氷みたいな脆さと儂さを内包した美少女。

「大丈夫だ。…それより、膝から降りてくれないか」

対する青年　黒髪／黒褐色の瞳／しなやかな長身を持つ、少女とは対照的な人物。低い声〓あくまで冷静。

「えー、しーちゃんのおひざ好きなのにー」

ブーイングしながら、青年の膝の上で天使じみた少女が足を揺らす。

少女の手はそつと青年の頬に触れた。

頬を切り裂く一文字の傷痕　おそらくまだ傷を負ってから時間はさして経っていない。

「……汚れるぞ」

「いーの！　それ、いたいのいたいのーとんでけー！」

少女は青年の膝の上で楽しそうに笑い転げる。

青年は相変わらずの淡泊な表情で、少女に身を任せていた。

と、部屋に新たな人物が入ってくる。

「こーら、百合亜、いい子にしてないと怒っちゃうぞー？」〓少し拗ねたような甘い美声。

「あー、ママ、おかえりー」〓少女の嬉しそうな反応。

「地院寺…早かったな」〓青年、静かに応じる。

第三者は片手に提げていた箱を近くの机に置く。

彼らがいる場所は一見、何の変哲もないオフィスだ。

青年はその内の一つに腰掛け、少女は青年の膝でやはりけらけらと笑う。

美声の来客〓知院寺と呼ばれた中性的な人物は青年に声を掛け

「…うーん、顔の傷だけか？ 至恩^{シオン}」

「取り敢えずは。こんなのは掠り傷だ」

「駄目だよちゃんと消毒して…うちの部署の花形の顔に傷なんて
…勘弁して欲しいからな」

「ゆりあもそう思うのー！」

「……………」

元気よく拳手する少女に、片眉を下げ

「いいから。自分でやっつく」

「うん。それでよろしい」

「えー、ゆりあがしーたーいーのー」少女 駄々をこね

「至恩に任せて置きなさい。傷口からばい菌入るかもしれないし。

…我が儘言う子にはおやつあげないよー？」

「ええっ！ ……うー、ごめんなさい…ママ」

「よしよし。こっちおいで」

少女⇨手招きする地院寺へと駆け寄り、胸元に抱きつく。

「それにしても、至恩が怪我なんて珍しいこともあったものだね」

⇨地院寺：不思議そうに

「…相手が悪かった。身体術式と重力術式を使う上に、武器も業物だったからな」⇨至恩：地院寺が持ってきた薬箱からガーゼを取り出しながら

「…『殺戮のバイオネット』。調べたけどね。…正直信じられないな。一介の違法術者がこんな代物持つてるなんて」

「業物には間違いないだろう？」

「うん。それも、業物の中でも至恩の『歳破』と並ぶ上級武装だ。…ファシズム時代の大頭が持っていた愛銃だね。いろいろと曰くつき
きの代物なんだ。…全く、どうしたものかなあ…」

地院寺⇨溜め息すら吐かないが、心底不安そう。

「ヨーロッパの施術式武装か…本場の流れを汲んでいるというこ
とか」

「そうだね。余計に厄介だ…違法術者の名前は『風間』と言った

よね

「ああ」至恩 問いかけに首肯。

「業物の武器より、そっちの方が気になるな……」

「どうしてだ？」

「『風間』の姓は特許姓だ。……ある条件を満たさないと名乗れない」

「俺の『区方寺』やお前の『地院寺』と同じようにか？」

「……うーん、それとは違うな。僕や至恩のは後天的なものだろう。風間は生まれた時からだ。風間の姓は……唯一つの一族しか名乗ることを許されていないんだ」

「……それは？」

「かつての狂言師の家系だね。正確には、『風間』を襲名するという形になるのかな……」

「狂言師？ 芸者の一族か？」

「……かもしれないね。詳しくは知らないな。そもそも、何で伝統芸能の家系が違法術者に墮ちるのかってのがね……嘘ついてるだけかもしれないし、大したあてにもならないよ」

「……そうだな」

至恩は自ら傷口にガーゼを当て、止血。

地院寺は金糸のような髪を揺らし、感慨深げに

「……にしても珍しいなあ。至恩が怪我するなんて。しかも顔に」

「めずらしいのー」

少女 百合亜も賛同する。

「相手が、最後の最後に施術式だけを発砲したんだ」至恩の怪我を気にしながら 青年。

「施術式……だけ？」至恩とんとする中性的人物

「空砲だ。実弾を放つと見せかけてな……対応が遅れてこの様だ」

自嘲でもなく、事実を淡々と述べる。

ただ、犯罪者を逃がしたことは悔しそだった。

「今時、違法術者なんて流行らないのに、奇特な人もいたもんだ」

ねえ」

「不謹慎なことを言うな地院寺。それに…数で言ったらまだ大勢残ってる」

「まあ、そうだね…」

彼らの属する術式管理局は、文字通り術式の私的利用を防ぐ為の局部である。

彼らが担当するのは、戦闘術式や身体術式絡みの事件であり、最前線と言っても良い。

術式は学問だ。

実的なものを施術と言い、その他のものを術・術式という。

錬金術の系譜を辿るこの流派は、地脈や聖霊的なものを利用しているとされる説が大きいが、詳しいことはまだ研究されている。

術式には『媒体』と『術者』が必要　つまり、道具と道具を扱う者だ。

ヨーロッパの異国で最初に発見された祖たる『媒介』を、幸か不幸か、日本人学者が国内に持ち帰り研究したことが全ての始まり。

原理を解き明かした研究者は、この魔法具に等しい代物を売買して利益を稼いだ。

売られた術具の数々は犯罪を助長し、やがて混乱を巻き起こす。

そして、術式を管理する局　術式管理局が創られた。

元凶が放たれてから半世紀近く経つ今でも、施術武器と違法術者は野に下り続けている。

こちらとしては休まる暇などない。

地院寺はゆつくりと立ち上がり、百合亜の手を取った。

「…少しは有給とか欲しいな、急がしいたらありやしない。…

ねえ、百合亜」

「んー、ママと遊園地行きたいの…」

賛同する少女を見やり、わざとらしい溜め息。

「行きたいよねー。今度休みとれたら行こうかー」

「うん！ 約束ッ！」

少女「弾ける笑顔

青年「相変わらずの無表情。

「…先に行つてる、地院寺、俺は後で局長に報告に行く」

「分かったよ」

青年の言葉に了承を返し、美貌の人物はオフィスを後にした。

「仕留め損ねた得物は案外、大きかったかもしれないぞ？」

「区方寺」

そんな言葉を残して。

頬杖を着いて、茫洋と風を感じた。

「あー、何か面白いことねーかなー」

独白・嘆息・一要望〓途方もない戯言

吐き出し、一息に身を起こす。

やや茶色がかかった髪が風に髷られる。

気だるげな彼の背には、向かい合わせになるように腰掛ける妙齡の女がいた。

「人生を詰まらないと嘆く者こそ、詰まらない人間だそうですねよ。風間」

響くやや低音ノ落ち着いた雰囲気ノ霞がかかった双眸　灰色の帽子に髪を入れ、コートやジーンズに至るまで男物の服装に身を包む、立ち姿のみを見れば中性的な女だった。

彼女は鉄製の松葉づえを布で磨いている。

青年は彼女へと振り返りもせず発する。

「違つって、一条。おれは今が退屈なんだよ」〓どこか拗ねたような少年の声音。

「では、今のあなたが退屈な人間ということですね」〓納得、とでも言いたげに女性の韻踏む声。

「…はっ」

嘲笑して、青年　風間は振り返った。

女性　一条へと目を向け

「仕事、今度は何？」

「喜んでください。あなたの大好きな平和な仕事ですよ」
言つと同時に差し出される携帯電話。

彼女の手袋に包まれた五指が掴むそれを、風間は受け取る。

「そりゃあ、皮肉ととるぞ」

「自由」

鷹揚に告げ、一条は目を伏せた。

磨いていた松葉杖を傍の壁に立てかけ、腰掛ける寝台に手をつく。

「風間、何か楽しいことでもありましたか？」

「なんでだよ」

少年 眉間に皺。

女 しなる弓のような眼。

「珍しく、嬉しそうな顔をしてるので」

「……そうか？」

少年 訝しげに自分の顔に触れる。

対する彼女はベッドのパイプに凭れ掛かって、窓の外を見た。

白い棗縁の窓、外には緑豊かな公園が見える。

「風間はすぐに顔に出ますから、分かりますよ」 〓 大人びた余裕の
笑み。

「知ったような口きくなあ」 〓 揶揄を含む口調

「付き合い、長いですから」

一条は朗らかな笑みを浮かべ、寝台から腰を浮かせた。

少年は背後の彼女を見やる。

「…もう行くのか」

無意味と知っていても、平坦な声でさり気なく引き留める。

彼女の返事はいつもどおり。

「あたしも、これでも多忙なんですよ。風間の健康診断に付き合い
だけでも、スケジュール的に無理してるんですから」

「あ、そ。…んで、どうだったんだ？」

わざと『それ』を示唆せず、青年は告げ

相手の中性的な女は壁に立てかけられた松葉杖へと手を伸ばす。

「問題はない…と思います。取り敢えず体は健康体。問題は施術式
負荷ですが…今のところは前兆すら窺えません。心配は無用でしょ
うね」

手に取った松葉杖を自らの脇に当て、一条は風間を一瞥。

「…あたしなんかより、陰間さんに診て頂いたらどうなんですか？」
「それは言わない約束だろ一条、どっちにしたって、あの人は今忙しい」

「こっちも忙しいんですが……」

「一条とあの人が忙しさの尺度が違うのさ。それにあの人は代金なんて要求しないだろ」

少年の言葉に押し黙る松葉杖の女性。

やがて、諦めたような吐息。

「…分かりましたよ。確かに、あたしは利息もきっちりつけますからね」

「商売上手だよ、一条は。ほんとにな」

犬歯を見せて笑う風間。

口唇に弧を描き、一条は戸口へと足を引きずりながら進んだ。

「では、今度は割安料金でお請けしましょう、常連さん」

「どーゆー皮肉だろうな、それは」

やや喧嘩腰の問いかけを流し、女性は松葉杖で歩む。

「深読みは精神病の太源ですよ」

くすくすと笑い声を洩らし、女は部屋を後にした。

病室に残されたのは一人の少年。

退屈に逆戻りした時間の中で、彼は独り言にしては大きく呟いた。

「あーあ、何か面白いことねえかなあ」

まるで、自分は詰まらないことしか経験したことがないとも言いたげに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808w/>

Dear/She's

2011年11月16日22時25分発行